

# Essay

Sapiarc.com

2016年2月26日(2016-1)

## 「2・26事件余話」

時の経つのが速く、新年になってから既に2箇月近くが過ぎて、今日は2月26日だ。昭和11年(1936年)2月26日に起きた2・26事件については、このエッセイ欄でも何回か取り上げてきた。今回は、文芸春秋3月号に掲載された「2・26事件 娘の八十年」が興味深いものだったので、これについて書いておこう。

この記事は、2・26事件の反乱軍に殺された渡辺錠太郎陸軍大将（当時の職名は教育総監）の娘で、現在89歳の渡辺和子さん（岡山県にあるノートルダム清心学園理事長）と昭和史が専門の作家保坂正康氏の対談だ。最初に書いてあることが面白い。2・26事件のことを知っている人が減ってきていることは確かなことだろうが、渡辺さんが学生に「2・26って知っている？」と尋ねると、「電話番号ですね」という答えが返ってくるのだそうだ。岡山には、226という局番があるかららしい。

渡辺和子さんはカトリックの修道女（太平洋戦争中の昭和20年に洗礼を受けた。これは珍しいことだっただろう）で、著書「置かれた場所で咲きなさい」は200万部も売れているそうだ。今後も売れ続けるだろう。私は、この本の題名は知っているが、読んではいない。しかし、彼女が渡辺錠太郎陸軍大将の娘で、2・26事件の目撃者であることは知っていた。

彼女は、父親が53歳で旭川の師団長だったときに生まれた。4人きょうだい（女、男、男、女）の末っ子で、父親にとくに可愛がられて育ったようだ。その父親と最後に交わした会話は、

父親がいつものように「和子、風呂に入るかい？」と尋ねたのに対して、「今日はお母さまと入る」と言って断ったことだった。その翌朝、父親は殺されたので、断ったことを彼女は後悔した。

多分昭和10年(1935年)の夏ごろに撮った写真を彼女は大事にしている。それは、彼女と父親の2人だけが写っているもので、場所は荻窪にあった自宅の庭かと思われるところだ。彼女は半袖の白い服を着て、父親に寄り添っており、父親は軍服姿で軍刀を杖代わりにして立っているが、顔は笑っている。保坂氏によると、高位の軍人は笑っている写真を撮らせなかったそうなので、これは愛娘だけと撮った例外的なものらしい。

渡辺錠太郎氏は、愛知県の貧しい家に生まれた。陸軍士官学校を首席で卒業し、恩賜の軍刀を受け、陸軍大学校も首席で卒業した。勉強好きの人で、本をたくさん買い込んで読んでおり、陸軍では「文学博士」と言われていたらしい。好きな言葉は、論語の「巧言令色、鮮(すくな)し仁」だったという。軍人らしく射撃も上手で、ドイツに駐在していたとき射撃大会で優勝したこともあった。

2・26事件当日の午前6時ごろ、安田優(ゆたか)少尉と高橋太郎少尉に率いられた29名の兵士が渡辺宅を襲撃した。和子さんは父母と川の字になって寝ていた。異変に気付いて、父母は起きて、母親は玄関から兵士を中に入れないよう、必死に頑張った。父親はピストルを構えて、

---

応戦するつもりだったようだ。和子さんは何が起きているのかわからなかったが、寝室にあった座卓の蔭に隠れるように、父親に目で合図されて、そのようにした。安田、高橋と数人の兵士は家の裏手の庭から土足で上がり込み、寝室のふすまを細く開いて、そこから軽機関銃で錠太郎氏の足を連射した。一瞬にして、氏の片足はほとんどなくなり、血や肉片が壁や天井にまで飛び散った。その後で、安田が剣でとどめを刺した。和子さんは、この始終を見たわけだが、2・26 事件の現場に居合わせた人で存命なのは彼女だけではなかろうか。このとき和子さんは9歳で、この体験が和子さんのその後に決定的な影響を及ぼしたことは確かだろう。

この対談には、以上を書いたことの他に、事件関係者の縁者と和子さんとのその後の関わりなどについてもいろいろなことが書かれている。これらを通してわかることは、和子さんは十分に自己抑制をすることのできる実に品の良い女性だということだ。しかし、彼女は聖女のような特別な存在ではなく、ごく普通の感性の持ち主だ。父親が惨殺された場に居合わせた人が聖女になったわけではないことがわかり、私は却ってほっとしている。（おわり）